河合ノ田坐ト云者名物ノ山櫻ノ眞壺、同キンカウノ壺進上イタシ、降參セシメ候處、キンカウ返シ遣ハサレ、山櫻ノ壺殘シ置カレ、瀧川左近ニ下置カレ候、

〔太閤記十六〕呂尊より渡る壺之事

泉州堺津菜屋助右衞門といひし町人、小琉球呂尊へ去年の夏相渡、〇文祿甲午三年七月廿日歸朝せしが、其比堺の代官は石田木工助にて有しゆへ、奏者として、唐の傘、蠟燭千挺、生たる麝香二疋上奉り御禮申上、則眞壺五十御目にかけしかば、事外御機嫌にて、西丸の廣間にならべつゝ、千宗易などにも御相談ありて、上中下段々に代を付させられ、札を押し、所望の面々、たれ〳〵によらず執候へと仰出さるゝなりこれによつて望の人々西丸に祗候いたし、代付にまかせ、五六日之内にこと〴〵く取候て、三ツのこりしを取て歸り侍らんと、代官の木工助に菜屋申ければ、秀吉公其旨聞召、其代をつかはし取て置候へと仰られしかば、金子請取奉りぬ、助右衞門五六日の內に德人と成にけり、

〔書言字考節用集七器財〕茶入（チヤイレ）　棗（ナツメ）其制象ニ棗實ニ故云爾、

〔倭訓栞前編十五〕ちや〇中略　茶入は磁合也、注春ともいふ、名物を玉堂とす、利休が圓座肩衝あり、織部の唐肩衝あり、又日野肩衝あり、

〔和漢三才圖會三十一庖廚具〕碾茶壺（ちやいれ）　俗云茶入

按、茶入高二三寸、大者四五寸、小坩可以盛碾茶、形狀名目數品難勝計、所謂文林、肩衝、小茄子、尻膨（フクラ）、丸壺、文茄、爲唐物之名物、古瀨戸、春慶、飛鳥川、青江、禾目（ノギメ）手等、爲本朝之名物、

〔茶道筌蹄四〕茶入之部

唐物　往古は唐物のみを用ゆ、其內茄子を上品とす、肩衝（カタツキ）、文林、是に次ぐ、此三品を盆點に用ゆ、其後品少く成し故、丸肩衝まで用ゆ、